平成 30 年産「上越地域米」栽培技術情報 No. 7

平成 30 年 7 月 23 日
上越地域農業振興協議会上越地域米振興部会

～葉色が急激に低下！的確な穂肥施用と水管理で稲体の活力を維持させよう！～

1　7月 19 日現在の生育状況

○出穂は平年より２日程度早い見込み。

品　種　名	出穂予想日
コシヒカリ（平坦地）	８月　３日
コシヒカリ（中山間地）	８月　７日
コシヒカリ（山間地）	８月 13 日
ゐずほの輝き	８月 12 日

【7 月 19 日現在のコシヒカリの生育概況】　　※（　）内は、測定値：指標値との比較

草丈	茎数	葉数	葉色(葉色値)
並 (81cm:103%)	並 (465 本/㎡:104%)	並 (12.3 葉:-0.1 葉)	並 (31.2:-0.8)

2　出穂直前の追加穂肥:葉色が低下している場合に施用（緊急時の対応）

◎「コシヒカリ」で 出穂期に葉色の低下が想定され、かつ高温が予想される場合は、出穂期直前に追加穂肥を施用すると品質向上効果が期待できます。

【分施体系における高温が予想される場合の３回目穂肥のめやす】

施肥体系(分施:基肥＋穂肥)	判定時期と葉色のめやす	施用時期、施用量
化学肥料＋化学肥料体系【慣行栽培】 ※3回目も化学肥料を施用	出穂期3日前の葉色(注 2) SPAD 値で 31 以下、葉色板で 4.0 以下のとき	出穂期3日前に窒素成分で1kg/10a を上限として施用
有機質肥料＋有機質肥料体系【減減栽培】 ※3回目に有機 50%肥料施用(注 1)	出穂期6日前の葉色(注 2) SPAD 値で 33 以下、葉色板で 4.5 以下のとき	出穂期3日前に窒素成分で1kg/10aをめやすに施用

(注 1)有機質肥料は、有機質由来の窒素を5割程度含む肥料　　(注 2)葉色は単葉測定値

【基肥一発体系】

○葉色が低下し、出穂期の葉色（SPAD値）が32～33（葉色板4.5）を下回ると予想される場合には、追加穂肥を実施する。
○有機100%肥料を施用する場合は、窒素の溶出パターンを考慮した上で、出穂期６～３日前に窒素成分で1kg/10a程度を施用する。
○なお、基肥一発肥料に含まれる緩効性肥料は土壌水分が不足すると窒素成分が溶出しにくくなるので、必ず飽水管理を実施する。

3　これからの水管理:飽水管理徹底で稲体の活力を維持

【飽水管理で稲体の健全化を図る】

○飽水管理とは、自然に水が減って田面に水がなくなり、溝や足跡の底に水が溜まっている程度になったらかん水を繰り返す水管理です。
○減数分裂期（出穂 12 日前頃）～出穂期にかけて稲が最も水を必要とする時期です。ほ場が乾くことのないよう注意しましょう。
○高温下での継続した湛水は、根腐れの発生につながるので適宜水の更新を行いましょう。

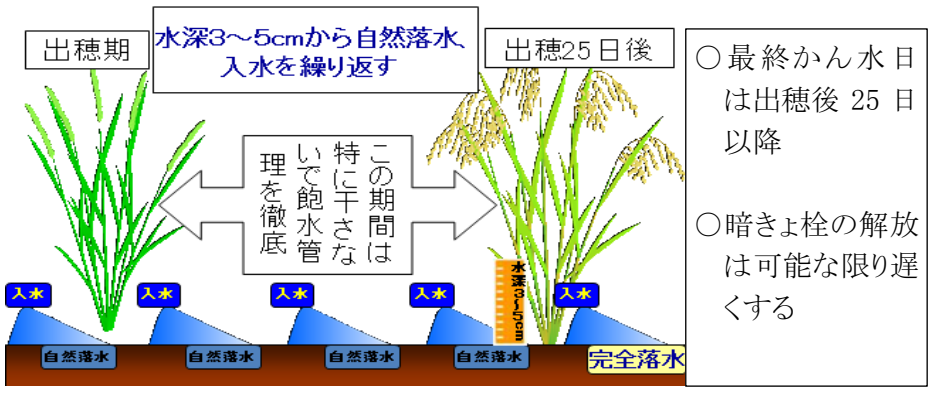
【完全落水は出穂後 25 日以降に実施】

○出穂後 25 日までは飽水管理を継続し、完全落水はそれ以降としましょう。
○早期落水は登熟が不良となり、未熟粒等が増加することで品質が低下するとともに、下位葉が枯れ上がりや倒伏が助長されます。
○特に、登熟期間が高温で経過する場合は、出穂後 30 日までかん水を行い、品質低下を防ぎましょう。

【フェーン時の水管理】

○フェーン時は急激に稲体水分が奪われ、大きな水分ストレスとなります。
○対策として速やかに湛水し、稲体からの急激な蒸散による障害（白穂や着色粒、稔実障害等）の発生を防ぎましょう。

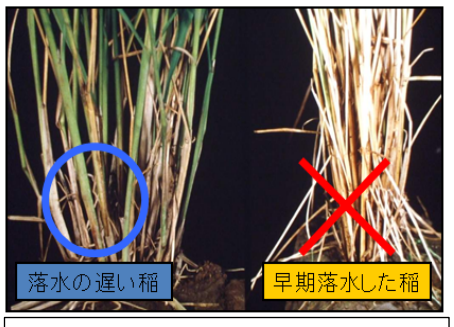
飽水管理のイメージ



○最終かん水日は出穂後 25 日以降

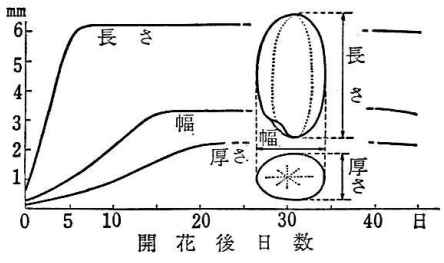
○暗きょ栓の解放は可能な限り遅くする

落水時期による茎活力の違い



落水の遅い稲は枯れ上がりが少なくなり、倒伏しにくく、登熟も向上します。

開花後日数と稔実



玄米は開花後 30 日頃まで成長するので、早期落水は品質を低下させます。

4　病害虫対策　～斑点米カメムシ類の多発に注意！～

○斑点米カメムシ類

・今年は予察調査において、例年より多くの斑点米カメムシ類が確認されています。
・向こう１か月間は高温が予想されており、斑点米カメムシ類の活動が活発になると懸念されます。
・生息地となる畦畔・農道は、イネの出穂以降もイネ科雑草が出穂・結実する前に除草を行いましょう。
・水田内のヒエやホタルイについても斑点米カメムシ類の増殖場所となるので、本田除草を徹底しましょう。
・薬剤防除を行う場合は、カメムシの種類や薬剤により散布適期が異なりますので注意しましょう。

お問い合わせ先(TEL)　　上越農業普及指導センター：025-526-9406　　JA えちご上越農業対策課：025-527-2050